［時代の証言者］共産党・不破哲三（６）結婚式会費は１人 150 円

2010.11.8　朝刊　９頁

東大を卒業した 1953 年３月は、慌ただしい毎日でした。１週違いで就職、結婚も重なり、人生の三つの節目が１度にきたんです。

妻とは、一高時代からお互いに顔は知っていました。あまり話したことはなかったんですが、大学に入ってから、風の便りに党渋谷地区委員会の「常任」になったと聞きましてね。

若いのになかなかすごいなと思い、49 年 10 月、用事があって訪ねた時に話し込んだのが、ことの始まりです。「都電の車庫の闘争はどうだ」といった話でしたが、その後の進展は速く、12 月には婚約したんです。私が 19 歳、妻が 20 歳でした。

東京都中野区沼袋の住まいの前で妻の七加子さんと（1956年）

結婚式は、当時珍しかった実行委員会形式で、会費は 150 円。総合雑誌が 100 円前後だったと思います。案内状の印刷も会場の飾り付けも自分たちでやりました。会場は一高の同窓会館だったんだけど、「ここで結婚式をあげた人はいない」と喜ばれてね。交渉に来たのが新郎だと後で分かって、びっくりされました。

お金がないので新婚旅行は５カ月後、産業を紹介するアルバイトの取材旅行と兼ねて行きました。旅費は１人分ですから、１週間ほどの行程で旅館に泊まったのは２日だけ。後は夜行列車や船中で眠りました。若いからできたことでした。

大阪で不二家のパフェを食べました。何年か前、先輩におごられて、非常においしかったんです。「今度ごちそうするよ」という約束をようやく果たしました。婚約時代は、会ってもただ歩くばかりでしたからね。

結婚した頃、妻は大田区労働組合連合会の書記をしていて、共働きが続きました。私が地方に出張した時は、手紙のやりとりが主な通信手段になりました。電話が珍しい時代です。私は日記を書かないんですが、残っている手紙を見ると、当時の生活や活動の様子がよく分かりますね。

結婚後、一番の問題は住居でした。当初は、私の実家で父の４畳半の書斎を拝借しました。その後はアパートや間借りの安い部屋を求めて中野、目黒、杉並区を転々としました。60 年に東京西部の「ひばりが丘団地」に当選したものの、当時の給料では入居資格を満たせない。「いついつまでに、これだけ上がる」という証明書を自分で作り、何とかパスしました。

59 年に誕生した長女と 3 人で 2DK の部屋に引っ越した時は、すごく立派な家に住むことになったなあと思いましたね。ここには 9 年間住みました。

（政治部　鳥山忠志）

［時代の証言者］共産党・不破哲三（7）ペンネームで論文寄稿

2010.11.9　朝刊　14 頁

私は、晴間があれば本を読む方なんです。読むのも割と早く、鉄鋼労連時代はミステリーに凝りました。勤務先近くと、自宅周辺の貸本屋さんとそれぞれ契約し、勤務地の店で借りた本は帰りの電車で読んでしまう。朝、地元で借りた本は出勤の間に読む。こういうやり方で外国の作家の作品をずいぶん読みました。

1950 年代に刊行されるようになったレーニン全集やマルクス・エンゲルス全集も、出る度に行き帰り
の電車の中でともかく通読することにしていました。結婚した 53 年の暮れ、妻と正月用の買い出しでデパートに行った時も、人込みの中で本を広げていたんです。しばらくはデパートに誘われなくなりましたね。

「不破哲三」のペンネームを使い、「前衛」に書いた論文

初めて政治論文を書いたのは東大在学中の 50 年でしたが、「前衛」への寄稿はこれが最初でした。「前衛」につながる研究会で報告したところ、「論文にまとめないか」と勧められて書いたら、採用されたんです。

鉄鋼労連に勤め始めて半年ぐらいの時でした。「前衛」の論文に「鉄鋼労連・上田建二郎」では具合が悪いから、ペンネームを考えたのです。その頃、野方の実家近くの「不破建設」というペンキ屋さんで争議があり、妻が応援に行っていました。その「不破」に「鉄鋼」の「鉄」をもじって「哲三」にした。長く使うつもりはなかったんです。

この論文に編集部が「まえがき」をつけ、「新しい理論家が現れた」と褒めちぎったんです。その後、事態が急変しました。翌月号に「党の路線に反する立場の論文だった。それを見抜けないで掲載したのは誤りだった」と、編集部の痛烈な自己批判が載りました。

後で聞くと、「不破論文」に対する態度が、当時の党の路線に忠実かどうかを測る“踏み絵”にされたといったこともあったようです。

「60年安保」の闘争は鉄鋼労連も熱心に取り組み、私は毎日のように国会を取り囲むデモに参加しました。

58 年の党大会前後からは、また「前衛」などに論文を書き出しました。53 年以来のいきさつもあり、「不破」を使い続けたんですが、「鉄鋼労連にいる上田のことらしい」という話が広まってね。労働組合、時には社会党からも、「不破」あてに講師依頼の電話がかかることもありました。シラを切り通しましたが、自宅に“偵察”に来る人もいました。

（政治部　鳥山忠志）

［時代の証言者］共産党・不破哲三（８）／党専従政策委員会に

2010.11.10　朝刊　27 頁

「党中央に政治研究室をつくる。非常勤でいいから部員にならないか」。1961 年の末ごろ、共産党から私と兄の上田耕一郎に、こう声がかかりました。

上田はそのころ、雑誌などに論文を発表していました。私も鉄鋼労連に勤めながら、党の綱領や革命の問題について論文を書いていましたから、その辺に注目する人がいたと思います。

私と上田以外は党本部の常勤職員で、私たちは週１回の会合に出るという立場でした。仕事は政党やその時々の政治問題を研究したり、討論したりすることで、私は社会党や民社党を担当しました。党中央の政策づくりや討議に参画することはなく、党としては様子を見ていたんでしょう。

研究室の責任者は宮本顕治書記長と聞いていましたが、会わずじまいでした。宮本さんは、国内外での数年来の激務によって、体を壊していたようでした。

64 年に入って、「政策委員会を作るから、党本部に移って仕事をしないか」と誘われ、３月に党専従、職業革命家としての生活を始めたのです。上田はもう少し早かったと思います。

政策委員会で最初の常勤は私たち兄弟だけでした。

代々木の党本部は木造です。妻からは「49 年の衆院選で党が 35 議席を獲得した時、２階の会議室でみんなと喜んでい

たら、床がミシミシして、崩れるかと思った」と聞きました。その２階の一室が仕事場です。ダルマストーブが一つあり、３月といっても寒いから、兄と火をおこすことから仕事が始まりました。

政策委員会に移った時も、責任者の宮本さんは中国・海南島で療養中でした。5 月に帰国した後、緊密な関係で仕事をすることになります。最初に会った時にまず、「これからは『赤旗』の『主張』も書いてもらいたい。朝に注文したら、夕方には出来てないと困るんだ」と言われました。それ以後、国際論争にかかわる論文だけでなく、国際問題や政治問題などの「主張」の仕事も、次々に回ってくるようになりました。

国際的な論文を書く時は、みんなの意見を聞いて仕上げるんです。どんな論文でも、一番熱心に読んで意見を言ってくれるのは宮本さんでしたね。

重要な問題は会って議論するのが普通でした。大抵は欄外に直しを書き込んだりするのですが、宮本さんの字は達筆すぎて読みにくかった。〝解読〟の特技を持った人の知恵を借りることがよくありました。

（政治部　鳥山忠志）

［時代の証言者］共産党・不破哲三（９）／ソ連水面下で「敵対工作」

2010.11.11　朝刊　12 頁

党本部の政策委員会で最初の大きな仕事は、当時のソ連との論争でした。

1960 年の 81 か国共産党・労働者党代表者会議で、世界の共産党は「独立した平等の党」と確認し合いましたが、ソ連は自らの政策に同調しない党を攻撃するようになりました。その大きな転機は、63 年の部分的核実験禁止条約でした。

ソ連共産党からの書簡（ソ連誌掲載）と

鉄鋼労連時代の私は、個々の論争はあっても、世界の共産主義運動は理論面での大局の統一はあると思っていました。条約賛成、反対の議論にとどまらず、ソ連の党が水面下で「ソ連派」結集の敵対工作を仕掛けているとは、非常勤時代にも全く知りませんでした。

うちの党は、内部問題として解決を目指す段階では、党内でも関係する部門以外には情報を広めません。私たちも、党本部でソ連にかかわる仕事を担当するようになって初めて事態の全容を知り、驚いたのでした。

政策委員会に勤め始めて１か月半ほどした 4 月 18 日、ソ連は突然、我々の路線を「マルクス・レーニン主義からの離反」などと全面攻撃する書簡を送ってきました。翻訳すると 3 万 5000 字にもなる長さでした。続いて、国会で「ソ連派」が旗揚げをしました。

ソ連との論戦で中心となったのは､彼らの書簡の全論点を論破する返書の執筆でした｡時々で必要な対応もしながら、8 月 26 日、１冊の本になるような約 12 万字の反論を発表しました。

この返書は分担して書き、それをまとめたものを指導部に回し、意見が出たら検討して織り込む、という作業を繰り返しました。当時はワープロやパソコンはおろか、コピー機すらない時代です。書き換える度にタイプで直すわけですがタイプというものは１語の直しが加わっても、周りを大きく打ち直さないといけません。最終的に仕上げるまで、私たちもタイプ室の職員も徹夜の連続でした。

しかし、私たちの返書は苦労しただけの成果をもたらしました。ソ連側は、最後まで一言の反論も発表できなかったのです。

ソ連の干渉に対する闘争はその後も続きますが、最初に書簡を受け取った時は「これが社会主義の党なのか」と本当に思いました。社会主義を名乗る国の政権党が、資本主義下の厳しい条件で闘っている党を全面攻撃するのですから。それが、私たちのソ連批判の実感的な原点となりました。

（政治部　鳥山忠志）

［時代の証言者］共産党・不破哲三（10）／圧巻のホー・チ・ミン発言

2010.11.13　朝刊　13 頁

1966 年 2 月から２か月間、初めて外国を訪問しました。共産党がベトナム、中国、北朝鮮に送った代表団の一員としてです。

我々はソ連と論争中でしたが、中ソを含む国際統一戦線結成のため、アジアの共産党と話し合うべきだと考えました。中国は「ソ連との共同行動は一切反対」と主張していました。

宮本顕治書記長を団長とする代表団 9 人は 2 月 9 日に中国船で日本を出発し、上海、広東経由で 17 日にハノイに到着しました｡北ベトナムの党指導部との会談は 5 日間続きました。

両党は国際行事などで顔を合わせたことはあっても、本格的な話し合いは初めてでした。会談は独特の経過をたどりました。北ベトナム側の発言が、日ごとに深みを増していったの

です。

北ベトナムを訪問中、ホー・チ・ミン主席と乾杯する不破さん（1966年２月）

初日のレ・ズアン第一書記の説明は、当たり障りがなかった。我々の立場や主張への理解が深まり、信頼が増すとともに、中ソとの関係も含め、突っ込んだ話になりました。最後は国際統一戦線や世界の運動の中での自主独立の問題でも、大いに意気投合しました。

中でも、ホー・チ・ミン主席の飛び入り発言は圧巻でした。会談の途中、予告なしに入ってきた主席が「今、ソ連も中国も援助してくれています。しかし、こういう援助です」と言いながら、指を広げた手を突き出したのです。続いて「我々が欲しいのはこういう援助です」と、開いた手を握りしめました。団結した力で援助が欲しい。問題の核心を表現した力強い握りこぶしでした。

最終日、チョン・チン政治局員が静かに語ったジュネーブ協定以来の歴史も、信頼の深さの表れとして私たちを感動させました。

「ジュネーブ協定締結時は、南ベトナムもほぼ解放していた。南北分断という結論は我慢できなかったが、ソ連も中国も『のめ』というので、泣く泣く従った」

「南では解放派がギロチンで処刑された。ソ連や中国に『決起やむなし』と提案してもウンとは言わない。最後に自分たちの判断で南での決起を決めた」

この後、宮本さんたちはハノイでホー・チ・ミンとの会談などに臨みました。私たちは北爆最前線のタインホアに向かい、「抗米戦争」の象徴ともなったハムロン橋を守る高射砲陣地の部隊や女性民兵隊と交流しました。その陣地で撮った写真は「アメリカ側に兵器の種類を教えないようにしよう」と、ベトナム戦争終結後に公開しました。

（政治部　鳥山忠志）